



こんな日にはきみ  
と笑ってたいだけ



やまゆり

なんでこうなったかな、とそばやのトミは思う。  
来る日も来る日も、そばをうっては、  
あのひとも居ない、  
繁盛もしていない商店街の片隅で生きていくなんて。

トミが、そばやを始めて二年。  
その間、いろんなことが起こったけれど、  
一番はやはりヤスコとのことである。  
ヤスコは、わたしの店をバイトで手伝っていて、  
そうこうしているうちに恋人同士になった。  
とても気が合ったんだろうとおもう、  
だからそれは自然のなりゆきというか、道理のような気もして、  
ほんとうのことを言うと今、  
一緒にいないことが、かなり不自然で不格好だ。  
ヤスコがどう思っているかは、別として。

なぜだろう。  
午後六時をさしても、客は二人で、  
こんな寒い夜はいろんなことを考える。  
ヤスコとのことも考える。  
例えば別れ際のこと。

「もうダメだね」  
「え？」  
「トシちゃん、もうわたしに気が無いから」  
「え？」

そう言って、ヤスコは、さも愉快という風に、  
「もうわたしのこと、すきじゃないって言ってんのさ」  
と、笑った。

「なに言ってんの」  
冗談だと思って、トミも笑った。

「もう別れるしかない」

きっぱりと、今度は突き放すように。

すかっとおる声だった。

実際のところ、その時ヤスコ以外に、  
好意を持っているひとがいたのだ。  
すごく好きというわけではなかったが、  
ヤスコには感付かれたのだった。

気が合うから、なんでもつうつうだったのかもしれないなあ。

今になって思い出すのは、やはり誰よりもヤスコのことばかりで、  
愛し続けることのむつかしさと、  
忘れ去ることのむつかしさが、  
いちどきに迫ってきて、  
それがボディブローのようにつらくて、  
トミはきょうも、無心でそばをうつ。

お客さんのおいしいという言葉や表情を見て一息つく。  
生きていくというのは、こういう感情たちをひきつれて、  
毎日をただただ紡いでいくことなのだろうと、  
それこそが、とてもいとおしい奇跡なんだろうと、  
なんとなくだけど、最近、分かった気がするのだ。

寒い。  
ゆらゆらと、  
外でゆらめくイルミネーションを見ている。  
きょうみたいな日は、  
ヤスコとただ笑いあって居たいのに、と、  
かなわない思いを、  
熱いそば茶で、飲みほした。